笑い一念　　その一

有冨洋二

瀬戸内地方の山陽道西部に位置する私の郷里に「笑い講」という天下の奇祭がある。講員たちが当番の家に集まり神職、長老の元、紋付き袴の正装を纏い真剣に笑いを競うのである。豊作感謝と稔りを祈願する鎌倉時代よりの神事。なんと会社の宴席などでも万歳三唱ならぬ「お笑い三唱」で会を締めたりする土地柄である。

およそ芝居の演出においては観客を泣かすことより笑わせることのほうが難しいし、演技そのものも同様である。

現在、俳句において言い尽くされた自然鑑賞句、人生観句が多いが、類句類想の創造性のない俳句は退屈である。よほどの俳人でない限りすでに佳句は作りにくい。その点、滑稽俳句は良い。「笑い」を作るのは難しいが、まだまだオリジナルな句を作れる余地がある。滑稽さを味付けにこの世の真実に迫ろうとする、まさにオシャレでイキなことではないか。

俳人には二通りがあり、滑稽を意識して作句する人とそうでない人である。

もとより俳句は滑稽を含むものであるが、あえて滑稽俳句と名乗ることは、そうではない俳句が多くを占めている今、必要な性質を取り戻すという意義がある。必要な性質というのが言い過ぎとしても「俳句の本質とは」

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

という難しい結論付けの下、同好の志が「滑稽俳句」というフラッグを掲げ、のびのびと作句に励み批評し合う環境を育んでいる。

ちなみに文学史上初めて俳諧の名が登場した古今集の中の「俳諧歌」（平安前期）に収められている五十八首の内の最初の歌は、

梅の花見にこそ来つれ鶯のひとくひとくといとひしもをる

鶯の春に感動するのではなく、擬人化させて「人が来る、人が来る」と鳴いて嫌がっている鶯に向かってツッコミを入れているという笑いであろう。

また撰者も著者も未詳にして室町末期にそれまでの連歌的世界とはっきり決別し、独自の世界を表した初めての俳諧連歌選集「竹馬狂吟集」（一四九九年）に収められている二十の発句の中から引いてみた。

折る人の手にくらひつけ犬ざくら

かつ散るも風に負けたるもみじかな

無名の人々の詠み捨てられる無数の句の中から拾ったものとされている。

当時の俳諧は連歌を行った後の打ち解けた雰囲気で酒も入り余興的なもので男たちだけであったから勢い猥雑なものや駄洒落のようなものも多くあるが、古代よりの古典にみられる掛詞、縁語などの言葉遊びがベースにはなっていよう。現代から見れば詩性、芸術性からはほど遠いものが

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

殆どではあるが、大和言葉を使用した雅の文化から飛び出し滑稽、通俗な世界へ踏み込んだ改革は、我々の愛すべき先達が成し得た快挙である。

（続く）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。